UIFA JAPON NEWSLETTER

No. 119 Aug. 25, 2021

Union Internationale des Femmes Architectes Japon　国際女性建築家会議　日本支部

■主な内容

・UIFA JAPON 2021 年度通常総会報告会
・第 28 回 UIFA JAPON 記念講演会
「地球環境時代としての木造建築」武松幸治氏の講演を聞いて
・被災地通信（26）東日本大震災 10 年目のインタビュー
・写真展「被災から 10 年―UIFA JAPON の見た岩泉町復興への歩み」が巡回しています
・会員参加の本 尾張徳川歴史コミックシリーズ第 1 巻「徳川家康とお亀の方」

記念講演講師の武松幸治氏が設計され、2019 年日本建築学会賞を受賞された新豊洲 Brillia ランニングスタジアム内の練習風景（写真 Nacása & Partners）

UIFA JAPON 2021 年度通常総会報告
UIFA Japon Annual Meeting Report 2021

森田 美紀
MORITA Miki

UIFA JAPON
森田 美紀 会長

2021 年 6 月 26 日（土）14:00 ～ 14:30、オンラインにて、第 29 回 UIFA JAPON 通常総会報告が開催されました。正会員 69 名のうち、書面審議表決書提出が 35 名（出席者 24 名含む）、委任状 22 名の 57 名で定足数を確認し、総会開催が成立。

第 1 号議案（2020 年度活動報告、会計報告、監査報告）は賛成 57 名で承認されました。第 2 号議案の 2021 年度の活動計画、予算案についても、賛成 57 名で承認されました。

今年度の総会も、新型コロナウイルスの影響で集会形式をやめ、昨年同様に書面による開催とすることを役員会で決定しました。総会当日は、会長、両副会長、ほか 21 名の参加で Zoom によるオンライン会議で報告という形になり、昨年同様、事前に、総会案内及び書面審議表決書･委任状と議案書案を会員全員に郵送し､書面表決（委任状）はメール・FAX 又は郵送で 6 月 20 日必着で回答をお願いしました。

おかげさまで、滞りなく終了したことをご報告いたします。ありがとうございました。

■各活動の継続について

2020 年度も新型コロナウイルスの影響が続き、新しい活動様式を探りながらのスタートでしたが、工夫して活動を継続してきました。6 回の役員会は全てオンラインで開催、各委員会のミーティングもオンラインで継続されています。リモートミーティングにも慣れてきて、遠方からも気軽にタイムリーに参加できる利点もあり、活動しやすくなった面もあります。コロナウイルスが落ち着くまでは、直接集まることはなるべく避けて、工夫して活動を続けていきます。

■海外交流について

2020 年に予定されていた､WAT（台湾女性建築家協会）メンバー訪日の交流も残念ながら、新型コロナウイルスの影響で延期となりました。訪日の目処はたっておりませんが、台湾交流チームを立ち上げ、オンラインで交流する方法など、工夫していきたいと思います。

6 月には WAT メンバー 2 人の訃報がメールで届きました。一人は WAT 名誉創設者で「台湾近代図書館の母」と呼ばれていた先駆的な女性建築家でした。もう一人は 2019 年に台湾を訪問した時にお会いした林さんでした。ご冥福をお祈りし、お悔やみの言葉を送りました。

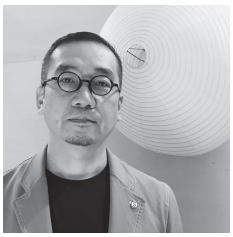
WAT（台湾女性建築家協会）メンバー写真（2020 年 3 月撮影写真､WAT 提供）
最前列右から 3 人目の方が林さん

第 4 回 Web 交流会のご案内
タイトル：「（仮）熊本の自然災害とこれから」

日　　時：2021 年 11 月 27 日（土）
講　　師：持田 美沙子 氏、盛高 麻衣子 氏（熊本県建築士会）、柿本 美樹枝 氏（神奈川県建築士会）
実施方法：Zoom による（申込みは改めてホームページ等でお知らせ）

「地球環境時代としての木造建築」武松 幸治 氏の講演を聞いて
Wooden Architecture for the Global Environment

谷村 留都　TANIMURA Rutsu



講師：武松幸治氏　E.P.A. 環境変換装置建築研究所代表（写真 © E.P.A.[注1)]）

今年度は初めての記念講演会の WEB 開催で、地方在住会員にはじっくり聞けるチャンスとなった。

■循環システム ～プロダクトから建築へ～

障がい者のスポーツ利用を目指した全天候型ランニング施設「新豊洲 Brillia ランニングスタジアム」はフレームデザインが七夕飾りのような印象を受ける。地場産業の陶芸や提灯をアレンジした武松氏の作品は、日本の伝統的な手法を現代的に翻訳した先人たちの感性をベースにしているが、この木造フレームの公共建築の表現にも共通していると感じた。本来、日本の伝統は廃棄物を少なくして使い切ることにあったが、産業の発達とともにスクラップ＆ビルドが定着していった。それに疑問を感じ、開催するインスタレーション展示では、終了後に装置や什器のリサイクルをするだけでなく、1 つの素材で商品を作るなど果敢に挑戦した。プロダクトで試みた価値観は建築においてさらに加速される。新しく建設することで生活環境は豊かになるが、同時に解体という行為と一体になっている。そのためには公共建築にも持続可能な素材である木材を使うこと、膨大な解体廃棄物を削減するという総合的な循環システムが重要になってくる。

■ CLT[注2)] ～理論から実践まで～

従来の集成材は梁、柱の補強材であるが、CLT はスライスした間伐材を縦横方向交互に貼り合わせて大きな面材を作る工法である。壁に限らず、床、屋根材にも利用できるのでプレファブ的工法で工期も短縮できるうえに、仕上げ材にもなるので一層の効果がある。紹介のあった実例の中で山型状の屋根の連棟形式の保育園（右下写真）はその特徴をよく表している。その他発展形の実例として、鉄骨とのハイブリッド、接合部や組み立て方の工夫をした詳細の紹介も多数あった。耐火性能の向上、トラスの組み合わせによる広いスパンの空間への対応等々、技術的にもデザイン的にもレベルの高い工夫とその試行錯語に圧倒された。理論だけでなく、実施設計、監理など総合的な手法も紹介され、氏の並々ならぬ熱意は独立にあたって名付けた社名を体現していると改めて感じ入った。

武松幸治氏が現在の仕事の考え方を図式化した、持続可能な森林資源循環システム図（作成 © E.P.A.）

■持続可能性の追求

2019 年の日本建築学会賞受賞の新豊洲 Brillia ランニングスタジアムを特徴づけている網目状のパーツを分解すると、ひらがなの「くの字」のようなパーツ 1 種類である。接合も最低限の部材で構成されている。この「くの字」のパーツは集成材で作られている。また、「くの字」の集成材を製作するために治具も同じ集成材で作られている。この計画では、木材は加工品になり、それを製作するための治具にもなるというフレキシビリティがあり、素材として優位性の一つになっている。

持続可能な建築行為、CO2 削減への効果、木質化での都市の耐久性、耐火性等々、これからの建築がどうあるべきかの課題は山積であるが、同時に新たな可能性が楽しみでもある。

■ CLT の可能性

沢山の質疑にも丁寧に回答をいただいた。構造的な耐久性においてはＲＣ造、Ｓ造とほぼ同等であるが、素材を含めての耐用性については、樹種や接合方法など、今後の対策次第である。リサイクルに関しては接着剤や他の材料との混合性があるので経過観察が必要であるが木材を使用するという優位性は残る。断熱性能もＲＣ造のように断熱材がなくてもほぼ同等という点で優れている。時間の限りを使っての説明に満足した講演であった。

CLT の質の高い活用を知って興味がわいたが、普通の木造住宅の設計をしている私の懸念は現在のウッドショックである。遡ること、1980 年頃、アメリカで日本車の販売が急増し見返りとして北米材の大量輸入が加速を始めた。資源が少ない日本で供給できる数少ない資源が木材であるが、山の保全管理不足は林業の衰退へとみるみる貧弱になった。最近多発している災害の遠因にもなっており、危惧されるが抜本的な解決がないままこういう状況に陥った。再び林業の重要性に関心が集まることが期待される。

注 1）武松幸治氏は地球環境の危機感を抱きつつ 1991 年に独立され、事務所名を環境変換装置建築研究所として略称で E.P.A.(Environmental Protection Architectural Institute) と名付けた。

注 2）CLT : Cross Laminated Timber の略称。JAS では直交集成板と呼んでいる。ひき板（ラミナ）を繊維方向が直交するように貼り重ね、製造された厚みのある大判のパネルで、建築の構造材や、土木用材、家具などにも用いられる。

武松幸治氏設計のこどもの森保育園全景
屋根と床に CLT を使用している（写真 Nacása & Partners）

2011 年 11 月 25 日発行のニューズレター 89 号から岩井紘子会員の連載:被災地通信 (1) が始まった。仙台に居住する被災当事者として「来て、見てくれ、そしてなんとかしてあげてくれ」と語った。この連載：被災地通信（26）を迎えるまでの 10 年間、岩井会員を突き動かしてきた原点は、被災直後の避難所で「おら、ウヂも流され、住むドコロもカセグドコロもカネもネグなった。ナヌを相談スロとユウのだ」と食ってかかられた言葉だという。ことあるごとに現地を訪ね歩き、その状況に憤り、新たな災害に見舞われたところには飛んでいき、当事者の声を聞き、独特の語り口で、ここに執筆し続けてきた。今回、その岩井会員へ、そして今考えることについて、拡大版執筆をお願いした。（編集）

右：事務所に貼られた東日本大震災沿岸地図の前に立つ岩井会員

東日本大震災 10 年目のインタビュー
Interview：A Decade after the Tohoku Earthquake

岩井 紘子　IWAI Hiroko

■錯覚から始まったインタビュー

「今日は－」。“あれから 10 年、どう生き抜いて来たか”のインタビューをすべく、約束していた中・高時代の我が友人宅玄関先で、最初に目にした 2 人の小さな子供の元気な声。「卓也くんの子供？ウソッ」、自分の勘違いも良い処。震災時と彼らの住宅の建設時をゴッチャにしていたのだ。今や彼は 34 歳の立派な成人。平成 7 年、当時高校生だった長男卓也君と弟妹ら 3 人と、3 代化粧品雑貨を営み市会議員をもされ、前出友人の弟さんでもあるご両親の高橋夫妻の明るく元気な 5 人家族の家を建築設計監理させて頂いた。初めて持つ各自の個室に興奮した打ち合わせ、多くの親類縁者が集まる漁港独特の賑やかな家だった。

■海と川から津波が閖上を遡上した

卓也君は新婚 1 年目、24 歳の 10 年前に東日本大震災遭遇。名取市閖上は 6000 人弱の住民中 900 人の死者と、全壊 2800 棟、半壊 1130 棟、町の 3 割が浸水、復興不可能と思われる海と河川からの大津波被害を受けた。幸いにも子供達はそれぞれ仙台在住の身であったので被災は小さかったが、地震の凄さに驚き、両親は大丈夫かと閖上に行ってみたところ、自慢の黄色外壁の家は流され跡形もなく、辿り着けなく自宅に戻ったとか。その後 3 日 3 晩避難所や病院等を探しあぐね、まさかと思いつつ遺体安置所に行って初めて変わり果てた両親に対面。思い余って叔母である私の友人宅に運んだ。泥水で顔形は見る影も無くなっていたが、死化粧師さん等により綺麗な何時もの穏やかな顔にして貰った両親の棺を、火葬の番が来るまで 10 日間程見守った。地震時、高橋氏は外出中だったが、若干足の悪い夫人のことや、議員という町の世話役の務めを果たすべく町に戻っての事だった。

沖合から 2㎞もあるが、1 級河川名取川と並行している昔から賑わいのある閖上商店街中心にあった家は、店舗部分は跡形もなく、住まい部分は基礎から抜け、土台諸共そっくり 200m 先の名取川堤防まで流され留まっていたと写真で知らされた。懐かしいやら、悲しいやら。ググッとくるものがあった。今は世話になった独り身の叔母の面倒をも見るべく、高橋家の長男として、亡き両親の代わりを生き抜かねばとの語りでインタビューは終わった。

■あの震災、そしてこの 10 年は何だったのか

2011 年、3 月 11 日（金）午後 2 時 46 分、三陸沖で国内観測史上最大マグニチュード 9.0、最大震度 7 の地震と大津波が発生。岩手、宮城、福島東北 3 県中心に死者 1.6 万、行方不明 2.5 万。避難生活者は今だ 4 万人余。うち県外に今なお 3.5 万人以上の避難を続けているという東京電力福島第一原発水素爆発による世界最大級放射能放出事故。

民主党政権下で起きた未曽有の大災害。国は同年 3 月 18 日には膨大な被災者対応に、生活支援地方自治に詳しいとかいう元自治省出身者民間人を起用し、政府被災者生活支援特別対策本部を設置、翌 2012 年 2 月復興庁が発足した。画して復興事業は全額国費負担という流れで最終的に 38 兆円もの国費が使われた。だが、どうしても未だに解らないのは、誰の、どこの発案で東北 3 県沿岸全てに防潮堤を造ることにしたのか。

■政権が代わり被災地はどうなったのか

2012 年 12 月には自民党に政変。とある建設会社のトップが「嵩上げ、防潮堤は土木業界が進言した。業界にとっては千載一遇のチャンスだからね」と語られていたのが耳を離れない。現に 2011 年暮頃には各自治体とも被災地なりの復興計画は出来ていた。が、財源の乏しい自治体は国の施策に翻弄されるだけ。一時は画期的な使途も委ねる交付金一括方式が検討されたらしいが、自民党政権下では復興対策は 5 省 40 基幹事業とし、各省に執行責任を持たせるという従来のひも付き方式になった。又、各自治体は、安全安心なまちづくりと称す区画整理、防災集団移転事業という名の下、約 1300ha に及ぶ被災した市街地の嵩上げや高台住宅地整備を初め、2013 年から今年 1 月にかけて避難住民用災害公営住宅を 17 県市町 86 地区に 6000 戸整備という、計画策定、工事発注・監理フルパッケージなる事業で、UR 都市機構に依存、生活再建復興を成し遂げた。

■ 10 年目　これが望んだ復興か

宮城、岩手のプレハブ仮設住宅は解消したものの、避難生活の長期化等での関連死者数約 4000 人を含む震災犠牲者数は 2 万人余にも及ぶ東日本大震災 10 年目を迎えてしまったが、地域再生度外視の過疎高齢化対策のチャンスとばかり、人任せ復興に走った被災 3 県。皆同じような市街地化を誰が望んだであろう。

場当たり的国の施策、限りある財源、時間の無駄使い等を思うに、二度とあって欲しくないこのような災害。自然に逆らわない共存共栄社会を育み、将来ある未来に挑戦する若者達に夢を抱ける島国日本、あんな防潮堤不必要だった。荒涼とした防災集団移転跡地、意味が解らない。思い描いた復興像からは程遠い仕上がりのこの 10 年の復興では。

No. 119 Aug. 25, 2021

Union Internationale des Femmes Architectes Japon

UIFA JAPON 事務局
〒 102-0083
東京都千代田区麹町 2-5-4
第 2 押田ビル ㈱生活構造研究所内
Phone: 03-5275-7861 Fax: 03-5275-7866
E-mail: uifa@liql.co.jp
URL: http://uifa-japon.com
発行 2021 年 8 月 25 日

THE SECRETARIAT OF UIFA JAPON
c/o LABORATORY FOR INNOVATORS
OF QUARITY OF LIFE
DAINI-OSHIDA BLDG.
2-5-4, KOUJIMACHI,CHIYODA-KU
TOKYO, JAPAN 〒102-0083
PHONE :+81-3-5275-7861
FAX :+81-3-5275-7866
URL :http://uifa-japon.com

写真展が巡回しています
「被災から10年-UIFA JAPONの見た岩泉町復興への歩み」
The Photo exhibition continues!
10 years after the disaster - UIFA JAPON charts Iwaizumi's progress toward recovery

毎年、岩泉で共に迎えた 3.11 メモリアルデイだが、このコロナ禍、昨年に続き参加できないため、この初春、10 年間の UIFA JAPON 会員の写真記録を時系列に並べた写真パネルを 2 セット作成し、岩泉と東京で「今年の 3.11 を共に迎えよう」と写真展を企画した。

東日本大震災「被災から 10 年―UIFA JAPON の見た岩泉町復興への歩み」展は 3 月 5 日の中央区女性センター「ブーケ 21」を皮切りに、7 月の世田谷「在林館」へと首都圏・東北の計 8 ヶ所を巡ってきており、さらに埼玉・仙台・名古屋へと続く（チラシ参照）。

在林館での写真展を最終日の 7 月 22 日に訪ねた

「在林館」は UIFA JAPON のメンバーであった在塚さんが運営する小さな画廊で、元はお母上のお住まいだったところを、しっとりと落ち着いた居心地のよい空間に展開したサロンのような空間である。そこに写真展がきた。岩泉町復興への日常を愛情ある目線で写し取った写真展は、このような空間で、これからを議論しながら、見ていただきたいなと思った。「被災から復興へと歩みを続ける人々、その中からこぼれてくる希望、喜びや連帯意識、郷土への誇り、女性たちの活躍の力強さ、男性と女性が共同して復興の歩みを進めることの大切さなど、10 年の記録です」とチラシに書かれていた。共感。「在林館」館主の在塚さんは「岩泉を身近に感じるとともに被災したその他の町の復興への関心も高められたように思います」と語る。

（渡邉 喜代美）

巡回地入りの写真展チラシ

在林館（写真：板東）

会員参加の本

尾張徳川歴史コミックシリーズ第 1 巻
「徳川家康とお亀の方」
Member's Work: "Tokugawa Ieyasu and the Lady Turtle." 伊藤 京子 ITO Kyoko

私が理事をしている特定非営利活動法人本丸ネットワークで初めて出版した「徳川家康とお亀の方」を紹介いたします。この本は尾張徳川の初代藩主徳川義直の母親お亀の方が戦乱の世を逞しく生き抜いた話です。コミック編（約 180 ページ）、尾張徳川の地を巡る資料編（約 50 ページ）の 2 部構成で尾張徳川創世期もわかり歴史好きには興味深いと思います。

以前、愛知で開催した「この指とまれ」で見学した名古屋城本丸御殿を覚えていますか。この建物は「名古屋城本丸御殿復元」を目指した市民活動から行政を動かし建設することが決まりました。本丸御殿建設の気運を高めるために市民参加の時代行列「春姫道中」を 2018 年の完成まで 24 年間開催してきました。御殿跡の礎石を見て「本丸御殿があったら良いのに」とのある一人の女性の想いが多くの市民を巻き込み様々な運動となりました。彼女は完成を見ず亡くなりましたが私たちは現在も本丸ネットワークとして活動を続けています。完成した今は名古屋城や隅櫓等城内の全体整備を目指して活動を続けています。現在はコロナ禍で活動が制限されていますがその中での活動の一つとして出版事業を試みました。第 2 巻、第 3 巻も女性を主人公に発行予定です。

特定非営利活動法人
本丸ネットワーク発行
価格：1760 円 アマゾン入手可能

■役員会報告

2021 年度第 1 回 5 月 12 日 オンライン会議 総会と記念講演会開催準備・Peatix での申込説明 議案書および収支予算内容確認 コロナ禍での各活動検討 写真展巡回報告 復興ハウスグループでオンライン交流会準備 NL119 号・120 号企画報告

2021 年度第 2 回 7 月 28 日 オンライン会議 総会等報告 NL119 号進捗 記念講演会報告 復興ハウス研究チームによるアンケート実施 源流研究会への問い合わせ 写真展実施状況 第 4 回 Web 交流会実施計画検討

■編集後記

オリンピック開催、色々なコロナも世界からやってくる？（薄井）／あらゆる災害を意識して暮らさねばならないほど地球環境の変化は私たちの日常に直結している（渡邉）／ピクトグラムのデザインをオリンピックの目的 (人間育成と世界平和) に重ねて改めて考え中（杉原）／熱海の土石流災害は、建設残土等条例違反の盛り土によるもの。自然への敬意を！（牛山）／新型「五輪株」の孵化とささやかれる。五輪後の顛末に怯える（井出）／オリンピアンの夢の舞台に寄せて、相互に違いを認め合い、平和を願う（御船）／コロナ拡大ひたひたと、ワクチン届かず延々と（宮本・編集長）